

研究開発4 海外グローバル研修

1 目的と期待される成果

(1) 目的

海外で研修を実施し、課題研究の成果を発表し、ディスカッションすることにより、異文化を理解するとともに、グローバル社会における生き方・在り方について考え、課題研究を深める。

(2) 期待される成果

日本の歴史・伝統・文化を世界に発信し、国際社会を牽引するリーダーとしての資質や能力が身に付くことが期待できる。

2 内容（令和2年度についてはコロナ禍において全て中止）

- ① S G H イギリス海外研修
- ② S G H ドイツ海外研修
- ③ S G H シンガポール海外研修
- ④ オランダ派遣
- ⑤ オーストラリア短期研修

3 実施方法

各研修については、普通科の生徒から選抜する。

- ① S G H イギリス海外研修（10名）2年次に実施
- ② S G H ドイツ海外研修（10名）2年次に実施
- ③ S G H シンガポール海外研修（20名程度）2年次に実施
- ④ オランダ派遣（5名）1年次に実施
- ⑤ オーストラリア短期研修（20名）2年次に実施

実施後、活動報告書及び活動の記録等を基に学校設定科目「G L アクティブ」の評価とする。

4 検証評価方法

検証方法は、生徒及び教員に対して、取組ごとに記名式4択式アンケートを実施し、その結果と健康状態の調査等の結果により評価する。また、保護者の評価も取り入れる。

5 実施内容 <その1>（5年間のまとめ）

(1) オーストラリア

【ア 概要】

訪問先	ブリスベン、ナンボー・クリスチャンカレッジ、クィーンズランド大学 等 (オーストラリア連邦)
日 時 及び 参加者	平成29年7月21日（金）～8月5日（土）15泊16日 2学年生徒20名 男子12名、女子8名 引率教員 校長 高橋輝雄、教諭 羽計仁子（英語） 平成30年7月20日（金）～8月3日（金）14泊15日 2学年生徒20名 男子6名、女子14名 引率教員 教諭 坂本光雄（英語）、教諭 内山浩史（地歴・公民） 令和元年7月20日（土）～8月3日（土）14泊15日 2学年生徒20名 男子5名、女子15名 引率教員 教諭 鬼崎晴雄（英語）、教諭 東森彩理沙（地歴・公民）

目 的	1 現地の高校生を対象とした課題研究の発表や現地高校生・大学生とディスカッションを通じて、異なる観点からのフィードバックを受けるとともに、異なる視点を 得ることにより、課題研究を深化させる。 2 現地の家庭や交流校での参与観察を通して、日本との比較を行い、グローバルな 課題について探究を深める。 3 英語によるコミュニケーション能力を高める。 4 異文化理解を深めるとともに、自国の文化を再認識する。
-----	--

【イ 日程】（令和元年度例）

月 日	スケジュール等	宿 泊
令和元年 7月20日(土)	・成田発	機内
7月21日(日)	・ブリスベン空港着 ・フィールドワーク（クイーンズランド博物館・ローンパイ ンコアラ園・マウントクーサ展望台） ・ナンボー・クリスチャンカレッジへ移動	ホームステイ
7月22日(月) ～7月25日(木)	(ナンボー・クリスチャンカレッジ語学研修)	ホームステイ
7月26日(金)	・日本文化プレゼンテーション、ナンボー・クリスチャンカ レッジ生徒とグループトーク	ホームステイ
7月27日(土) ～7月29日(月)	(ナンボー・クリスチャンカレッジ語学研修)	ホームステイ
7月30日(火)	・課題研究発表、ナンボー・クリスチャンカレッジ生徒とデ ィスカッション	ホームステイ
7月31日(水) ～8月1日(木)	・ナンボー・クリスチャンカレッジ語学研修・交流会	ホームステイ
8月2日(金)	・クイーンズランド大学訪問、講義、大学生とのディスカッ ション	ホテル
8月3日(土)	・ブリスベンへ移動、空港発 ・成田着	

【ウ 事前指導】（令和元年度例）

回	日時	学習内容
1	4月11日(木)	自己紹介・リーダー決め・連絡網作成・課題研究について
2	4月19日(金)	保護者説明会
3	4月26日(金)	グループ決め・日本文化紹介プレゼン準備
4	5月 9日(木)	日本文化紹介プレゼン準備
5	5月10日(金)	前年度派遣生徒との交流会
6	5月15日(金)	特別講義 オーストラリア地誌 関研一 教諭 (地歴・公民)
7	5月28日(火)	日本文化・日本語原稿提出
8	6月 8日(金)	S G H課題研究・日本語原稿提出
9	6月13日(木)	英語原稿・P Pスライド準備
10	6月14日(金)	日本文化・S G H課題研究発表英語原稿提出
11	7月 8日(月)	S G H課題研究発表リハーサル(英語)

1 2	7 月 1 0 日 (水)	日本文化紹介リハーサル (英語)
1 3	7 月 1 2 日 (金)	S G H課題研究発表リハーサル (英語)
1 4	7 月 1 7 日 (水)	日本文化紹介リハーサル (英語)
1 5	7 月 1 9 日 (金)	S G H課題研究発表リハーサル (英語)・結団式

*この他、英語で様々なことを説明する準備として、昼食時の会話練習 (ALT と共に週 1 回)

【エ 現地での活動】

(ア) 日本文化発表

ナンボーカレッジの日本語選択者を対象に、英語で S G H課題研究もしくは日本文化の発表を行う。4つのグループに分かれ、A 3 用紙 (写真やグラフなど) とテーマに必要な現物を用い、それぞれの発表と質疑応答の後、各自が準備した質問やアンケートに回答してもらう。複数の日本語授業への参加や、1 回の授業内でのグループ・ローテーションにより、複数回の発表・調査機会を得ることができる。

発表テーマ

平成 2 9 年度

①茶道 ②駄菓子 ③祭り ④日本の行事

平成 3 0 年度

①佐倉・成田周辺にインバウンドを呼び込むには ②日本のペット事情

③コメを使った日本の食文化紹介 ④世界あんこ化計画

令和元年度

①日本のコメのお菓子 ②佐倉の紹介 ③日本固有の道具 ④お茶

(イ) S G H課題研究発表

ナンボーカレッジの 1 0 年生 (高校 1 年生相当) の生徒を対象に S G H課題研究発表を行う。テーマごとにグループに分かれて発表した後、各自が準備した質問やアンケートに回答してもらう。

発表テーマ

平成 2 9 年度

①選挙 ②世界で愛されるアニメを ③東京オリンピック ④戦争を語り継ぐ

⑤食品ロス (ドギーバッグ) ⑤移民・難民の受け入れ ⑥日本のマナー、ルール

⑦伝統工芸を広めよう

平成 3 0 年度

①通勤ラッシュ解決 (サマータイム導入) ②わかりやすいゴミ捨てマナー

③MOTTAINAI (落花生の殻の活用) ④戦争を語り継ぐ

令和元年度

①節水 ②食品ロス ③食物アレルギー ④ジェンダーギャップ

(ウ) クイーンズランド大学訪問

①キャンパスツアー

大学生による約 1 時間のキャンパスツアーで、様々な学部の校舎、博物館等を見学する。

②大学生とのグループトーク

前半に課題研究発表、後半はグループトークを行う。課題研究発表及び質疑応答を小グループローテーション形式で行う。後半のグループトークでは、生徒が用意した課題研究の質問をしながらディスカッションを行う。

③講義

平成 2 9・3 0 年度 “Multiculturalism and Diversity in Australia”

オーストラリアの多様性、その強みと問題、多文化主義の必要性

令和元年度 “Introduction to Australia’s National Environment”

オーストラリアの動植物の多様性

【オ 事後指導】

(ア) レポート

帰国後、生徒は研修の成果をレポートにまとめて提出する。

レポート抜粋（平成29年度例）

私は日本の選挙をよりよくするためにはどうすれば良いかというテーマで課題研究を進めています。特に、若い世代の投票率が低いということを問題としてこれからの未来を背負う若者たちを対象に調べています。日本では満18歳以上の国民、誰でも平等に投票する権利がありますが義務として行わなければいけないものではありません。一方、オーストラリアでは必ず18歳になると投票しなければなりません。そこで私はオーストラリアの若者は自分達の選挙についてどのように思っているのかアンケートを実施しました。

まず、「オーストラリアの選挙制度についてあなたはどのように思いますか？」という質問の結果です。



理由 Good と答えた人はすべての人が国のことに関わることができるから。etc
Bad と答えた人は投票したくない人にとっては公平ではないから。etc

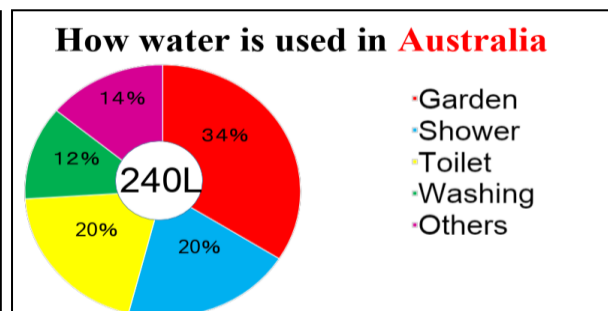
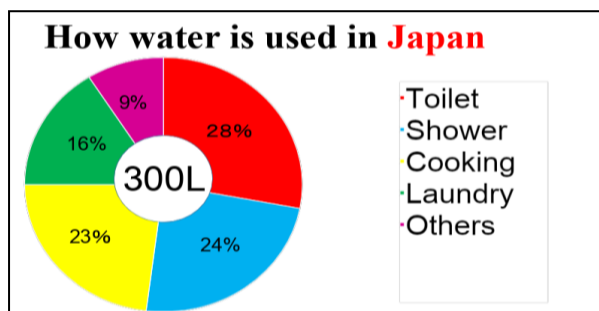
このように Good と答えた人が多いのですが、大学生の方の話によると植民地時代から、オーストラリアの人々は選挙権を持つことを望んでいたそうです。そして、国の投票は年にあるのかな、州別の投票が年に1回ぐらいのペースで行っているそうです。移民が多いため、国民が政治に関わることを大事にしているのだなと思いました。

レポート抜粋（令和元年度例）

私たちは水をテーマに SGH 課題研究を行った。まず日本での準備段階では、日本とオーストラリアの各家庭ではそれぞれどのくらいの量の水を使っているのか、またその内訳などを調べた。オーストラリアは降水量が年間を通して日本より少なく、日本よりも節水に力を入れているなど水について関心が高いことなどがわかった。

実際にオーストラリアに行ってホームステイをすると、水を大切に使うオーストラリアの文化を体験することができた。また、ナンเบอร์・クリスチャンカレッジの生徒に課題研究発表をした際に、オーストラリアの節水方法について教えて欲しいと聞いてみると、いろいろな節水方法を教えてくれた。例えばシャワー用に雨水をためるタンクを家庭に用意しておくこと、風呂を毎日とはめないこと、お皿を洗う時にはシンクに水をためてその中ですすぐだけにすること、家庭によっては食洗機を使って余計な水を使わない用になっていること、などである。

プレゼンテーションの準備から発表までで学んだことは、日本人はもっと水の大切さを理解しないといけないということだ。災害などの緊急時には日本の確保が問題になることがある。私たちは水が限りあるものであることを周知させ、日常と緊急時、両方の場合に必要な節水方法を広めていくべきであると感じた。



(イ) 報告会

毎年10月のGL探究を利用して報告会を行い、研修成果を1、2学年生徒と共有する。

- ① 日時 10月初旬 GL探究（総合的な学習（探究）の時間）
- ② 対象 1、2学年生徒
- ③ 場所 本校体育館
- ④ 内容 課題研究の発表やアンケート、クイーンズランド大学訪問についての報告。

（ウ）アンケート

帰国後、参加生徒にアンケートを実施した。下は実施3年間の参加生徒合計60名の回答である。毎年同様の回答傾向を見せている。

1 この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
80.0% 48人	20.0% 12人	0	0
2 この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
90.0% 56人	10.0% 6人	0	0
3 日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができる。			
かなりできる	まあまあできる	あまりできない	全くできない
6.7% 4人	86.7% 52人	6.7% 4人	0
4 あるトピックについて英語でプレゼンテーションすることができる。			
かなりできる	まあまあできる	あまりできない	全くできない
23.3% 14人	71.7% 43人	5.0% 3人	0
5 あるトピックについて英語でディスカッションすることができる。			
かなりできる	できる	少しできる	全くできない
6.7% 4人	46.7% 28人	46.7% 28人	0
6 今回の海外研修で、課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
51.7% 31人	31.7% 19人	15.0% 9人	1.7% 1人

【カ 成果と課題】

研修目的1、2の課題研究の深化、3の英語コミュニケーション能力の向上、4の異文化理解、日本文化理解ともに、十分に達成されていることが、生徒の活動の様子、報告やアンケート結果などから総合的に判断できる。

日本文化や課題研究発表を現地の小グループの中学・高校・大学生に対し何度も繰り返し行う機会が得られ、生徒の発表訓練の貴重な場となった。発表の回数を経るにつれ、自分の言葉で自信を持って語れる部分が増えた。

発表へのフィードバックをもらい、関連する聞き取り、アンケート調査を行うことで、オーストラリア人の見方・考え方を知ることや、日本とオーストラリアの比較をすることができた。特に、現地の学生にとっても関心が高い話題、社会課題として共通認識されている話題については質問、感想、意見ももらいやすく、有意義な機会となった。例としては「節水」「環境」「選挙」「食品ロス」「ゴミ」「移民・難民」である。また、具体的な実演、品物、映像を交えた日本文化紹介もフィードバックをもらいやすかった。ここでの調査の結果はそれぞれが持ち帰り各自の班のその後の研究に活用されていた。

一方で「戦争を語り継ぐ」のように、現地での関心は低く、フィードバックをもらいにくいも

のもあった。また、グループ数の調整のため、異なるSGH研究課題に取り組む同士で班を組まなければならない年度もあり、必ずしも自分が行いたい発表を全てできたとは言えない場合もあったが、生徒は独自調査をするなどして補っていた。(上記アンケート項目6の「あまりあてはまらない」「全く当てはまらない」はこのためと思われる。)

例年の研修で課題となるのが、発表後の質疑応答やグループディスカッションで必要となる即応力である。課題研究の内容やディスカッションの話題が難しく複雑になるほど、自分の言葉で伝えることに難儀していた。但し、このような力は一朝一夕に育まれるものではなく、生徒にとっては歯がゆい思いも含めて大変よい経験となり、その後の研究・学習姿勢にも良い刺激となっていると言える。(上記アンケート項目5のディスカッションに対し、半数が「少しできる」に留まっているところに顕著に表れている。)

また、オーストラリア研修では、ホームステイや、バディの生徒と同じ授業に参加することで、現地の暮らしや文化を实际体験したことで、課題研究を進めるためのヒントや、新たな疑問の発見に繋げることができた。言葉の壁に戸惑ったり、コミュニケーション不足によってお互いに誤解が生じて不安になることもあったようだが、ホームステイ先で発表リハーサルをして意見をもらうなど、課題研究を通してコミュニケーション能力を高める相乗効果があった。



ナンボー・クリスチャンカレッジでの課題研究発表



大学生とのディスカッション

(2) シンガポール

【ア 概要】

訪問先	クレア（自治体国際化協会）・シンガポール事務所 St.Joseph's Institution（セントジョセフ中高校）、シンガポール国立博物館 等
日時 及び 参加者	平成29年9月13日（水）～9月16日（土）3泊4日（機内泊1日を含む） 2学年生徒17名 男子6名 女子11名 引率教員 教諭 内山浩史（地歴・公民）、 教諭 井守雄一（英語） 平成30年9月12日（水）～9月15日（土）3泊4日（機内泊1日を含む） 2学年生徒17名 男子4名 女子13名 引率教員 教諭 滝口圭太（英語）、 教諭 井守雄一（英語） 令和元年9月18日（水）～9月21日（土）3泊4日（機内泊1日を含む） 2学年生徒17名 男子4名 女子13名 引率教員 教諭 高柳良訓（地歴・公民）、 教諭 井守雄一（英語）
目的	1 現地の学生との交流を通じて国際的視野を広げ、さらに英語によるコミュニケーション能力を高める。 2 異文化への理解を深めるとともに、自国の文化を再認識する。 3 現地の高校生を対象に課題研究の成果を発表するとともに、ディスカッションを行い、考えを深めたり異なる視点を得たりすることにより、課題研究を深化させる。

【イ 日程】（令和元年度例）

月日	スケジュール等	宿泊
令和元年 9月18日(水)	・羽田発 シンガポール着 ・フィールドワーク（イスラム寺院、仏教寺院見学等）	ホテル
9月19日(木)	・フィールドワーク（シンガポール国立博物館：博物館等で日本との歴史伝統文化比較） ・クレア（自治体国際化協会）シンガポール事務所訪問（現地校でのプレゼンテーションに向けた準備、事務所職員による英語でのプレゼンテーション等への助言等）	ホテル
9月20日(金)	・St.Joseph's Institution でのプレゼンテーション、ディスカッション、授業体験 ・フィールドワーク（リトル・インディア、ナイトサファリ） ・シンガポール発	機内
9月21日(土)	・成田着	

【ウ 事前指導】（令和元年度例）

（ア）日程

回	日 時	学習内容
1	6月11日（月）	リーダー決め・連絡網作成・課題研究について
2	6月25日（火）	研究内容と派遣を見据えた今後の取り組みについて
3	7月 8日（月）	シンガポールの歴史・文化・風土についての特別講座 関研一 教諭（地歴・公民）
4	7月10日（水）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）①
5	7月11日（木）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）②
6	7月12日（金）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）③
7	7月16日（火）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）④
8	7月17日（水）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）⑤
9	7月18日（木）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）⑥
10	7月19日（金）	プレゼンテーション（日本語）と発表内容の修正
11	7月25日（木）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）①
12	7月31日（水）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）①
13	8月 7日（水）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）②
14	8月19日（月）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）③
15	8月26日（月）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）④
16	8月30日（金）	リハーサルと発表内容の修正①
17	9月 3日（火）	リハーサルと発表内容の修正②
18	9月 6日（金）	リハーサルと発表内容の修正③
19	9月12日（木）	結団式・校長挨拶・引率挨拶・台詞の暗記とリハーサル①
20	9月13日（金）	台詞の暗記とリハーサル②
21	9月17日（火）	最終確認

*この他、英語で様々なことを説明する準備として、昼食時の会話練習（ALTと共に週1回）

【エ 現地での活動】

(ア) St.Joseph's Institution (SJI) での発表・討議

S J I の約生徒 30 名に向けて課題研究発表を行い、質疑応答を通してフィードバックや情報を得る。2～3 組が全体に向けたスライドによる発表を行い、残りは小グループに対するポスター・セッションを数回行う。S J I 生徒による発表も行われる。

また、この発表に先立ち、前日にクレアシンガポール事務所で発表リハーサル・準備を行い、現地所員からフィードバックをいただく。

発表テーマ

平成 29 年度

- ①戦争を語り継ぐためにはどうすればよいか？～自分たちも含めた語り部の育成～
- ②食料自給率、過疎化問題いっきに解決～農産物を電車で販売しよう！～
- ③相互理解のために、私たちのできること
- ④救え！殺処分される動物たち！～日本・ヨーロッパの文化の違いから検証する～
- ⑤インバウンドへ日本の食文化（ラーメン）を広めよう
- ⑥難しい英文法はいらない～単語で伝わる私の気持ち～
- ⑦Wonderful water of Japan～日本の水文化から水の大切さを発信～
- ⑧訪日外国人が快適に過ごすため～私たちは何を伝えるだろうか～
- ⑨日本のコメをどのように世界に広められるか
- ⑩Let's food rescue! ⑪TSUKEMONO～漬物で食品ロスをなくそう～
- ⑫植物油の普及～健康な油とは～
- ⑬エネルギー消費削減～緑のカーテンをつくろう～

平成 30 年度

- ①PEANUTS REVOLUTION
- ②AKIYA HOTEL
- ③Regional Vitalization of Sakura and Yokoshibahikari
- ④Let's eat fish for health!!
- ⑤Creating An Interest in Politics!～By the Students、 For the People～

令和元年度

- ①Finding Water in Emergency
- ②Dietary Symbols for Various Kinds of People
- ③New Childcare Centre System
- ④Welcome to Sakura
- ⑤Emergency Information Brochure
- ⑥Reducing Food Loss ~My Box Project~
- ⑦Sweet Bean Paste
- ⑧Prevent Elderly People from Becoming Malnourished

S J I 発表テーマ

平成 29 年度「シンガポール国内の経済格差を解決するためにはどうしたらよいか」

平成 30 年度「シンガポールの多民族共生社会について」

令和元年度「世界の環境保全のために自分たちができること」



※ SJI 生からの質疑応答例（日本語訳）（平成 30 年度例）

○ Prevent Elderly People from Becoming Malnourished

Q 噛む力が弱まった人にはどのような対策が考えられますか。

A 材料を小さいサイズに切って作ったお総菜等の販売を考えています。

Q 低栄養素解決策について、例として「3食の食事」「楽しいと思える食卓」「バランスの取れた食事」を挙げられましたが、「バランスの取れた食事」以外は原因と直接関係がなく、考える必要はないのではないですか。

A その他の2つの解決策は「バランスの取れた食事」の取れる環境作りを支えるもので、無視できない要素と考えています。

(イ) St. Joseph's Institution (SJI) での現地調査例「あんこ試食会」(平成30年度例)

(研究概要)

栄養があり、健康に良い「あんこ」を世界に広めたい。あんこは多くの和菓子に使用されているが、海外の人に受け入れられない理由は過度な砂糖の使用にあると考えた。本研究においては、砂糖の甘さを中和させるものとして、いくつかの飲み物との相性を調べたい。

あんこ試食会の概要

日本の市販のあんこをシンガポールに持って行った。まず、あんこを市販のプラスチックスプーンで食べてもらい、食べた後にお茶等の甘さを中和させる飲み物を飲んでもらって感想を書いてもらった。中和させる飲み物として、日本からはほうじ茶と煎茶を持って行き、現地で緑茶とコーヒーを準備した。

調査結果

○あんこがおいしいという感想を多くの生徒が持ったが、中にはあんこを拒絶する人もいた。

○あんこと日本茶の組み合わせが一番おいしいという感想を多くの生徒が持った。

○少数ではあるが、あんことコーヒーの組み合わせが一番おいしいという生徒もいた。コーヒーの中に溶かしてもおいしいのではないかという意見ももらった。

考察

○試食会前の調査では、「あんこの甘さは海外では受け入れられない」ということであったが、あんこの食感や味を好んだ生徒も多く、アジア圏では受け入れられる甘さであるかもしれない。

○日本茶との相性の良さを裏付ける結果が得られ、あんこを日本茶とともに食す文化を広められる可能性がでてきたのではないかと。

【オ 事後指導】

(ア) レポート

帰国後、生徒は研修の成果をレポートにまとめて提出する。

(イ) 報告会

毎年10月のGL探究を利用して報告会を行い、オーストラリア研修参加者と共に研修成果を1、2学年生徒と共有する。

① 日 時 10月初旬 GL探究(総合的な学習の時間)

② 対 象 1・2学年生徒

③ 場 所 本校体育館

④ 内 容 セントジョセフ中高校でのSGH課題研究の発表や質疑応答の内容、アンケート結果等についての報告。

(ウ) アンケート

帰国後、参加生徒にアンケートを実施した。下は実施3年間の参加生徒合計45名の回答であるが、項目によっては、質問内容が異なる平成29年度の結果を除いてある(合計28名)。

① この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。

おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
75.0% 21/28 人	25.0% 7/28 人	0	0

② この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。

おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
82.2% 37/45 人	15.6% 7/45 人	2.2% 1/45 人	0

③ 日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができた。

かなりできた	まあできた	あまりできなかった	全くできなかった
3.6% 1/28 人	60.7% 17/28 人	28.6% 8/28 人	0

④ 自分の課題研究をシンガポールの高校生を対象に英語でプレゼンテーションすることができた。

かなりできた	まあできた	あまりできなかった	全くできなかった
60.0% 27/45 人	37.8% 17/45 人	2.2% 1/45 人	0

⑤ 課題研究の内容についてシンガポールの高校生と英語で話し合うことができた。

かなりできた	まあできた	あまりできなかった	全くできなかった
22.2% 10/45 人	66.7% 30/45 人	11.1% 5/45 人	0

⑥ 今回の海外研修で、課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。

おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
31.1% 14/45 人	55.6% 25/45 人	8.9% 4/45 人	0

【カ 成果と課題】

この研修の目的である 1、国際的視野の醸成、英語コミュニケーション能力の向上、2、異文化及び自国文化理解と 3、課題研究の深化について、いずれも十分な効果を上げていたことが、現地での活動や研究の様子、生徒の報告、アンケート結果などから総合的に判断できる。

参加生徒はシンガポールの多文化共生社会での施設見学や学校交流を体験することで、文化的、言語的、宗教的に異なるバックグラウンドを持つ人々がいかに共存しているかを知ることができた。また、日本との相違点や共通点を見だし、自国の文化・社会について考えた生徒も多く、将来のグローバル人材の育成という視点からも有意義な研修であった。

S G H課題研究の発表に際しては、クレア・シンガポール事務所の日本人及び現地スタッフの方々から助言を受けつつ練習を繰り返す機会をいただき、現地交流校のセントジョセフ中高校では、より自信を深めて発表することができた。これらの 2 箇所での発表及び調査により、日本人とは異なる視点からの意見や感想、情報を得ることができ、多くの生徒が自らの視野を広げ、研究を発展させるために持ち帰り、班員と共有するなどし、研究の深化に役立った。

多方面への派遣生徒同様、英語での即興でのやり取りに難があるため、事前指導を早い段階から始めることで補った、自らの英語の乏しさに悔しさを感じる一方で、英語でのコミュニケーションに喜びを感じるというのが例年の生徒の様子であった。同年代のシンガポールの生徒の英語コミュニケーション能力も大変刺激になり、参加生徒にとっては、その後の学習に対する動機を高める場となった。

(3) オランダ

【ア 概要】

訪問先	ライデン（シーボルト博物館、国立民族学博物館、ライデン大学）、アムステルダム（アンネフランクの家） ウィンシュホーテン（ドラード・カレッジ） 等（オランダ王国）
日 時 及び 参加者	平成 28 年 11 月 10 日（木）～11 月 20 日（日） 10 泊 11 日 1 学年生徒 5 名 男子 2 名、女子 3 名 引率教員 教諭 井守雄一（英語科） 平成 29 年 11 月 9 日（木）～11 月 19 日（木） 10 泊 11 日 1 学年生徒 5 名 男子 3 名、女子 2 名 引率教員 教諭 鈴木菜生（英語科） 平成 30 年 11 月 15 日（木）～11 月 25 日（木） 10 泊 11 日

	1 学年生徒 5 名 男子 1 名、女子 4 名 引率教員 教諭 鈴木菜生（英語科） 平成 29 年 11 月 9 日（木）～ 11 月 19 日（木） 10 泊 11 日 1 学年生徒 5 名 男子 2 名、女子 3 名 引率教員 教諭 戸村玲子（英語科）
目 的	1 本校 S G H 研究テーマである「日本の歴史・伝統・文化」が海外でどのように紹介され、現地の人々にどのようにとらえられているか現地調査する。 2 インタビュー・アンケート等、フィールドワークの手法を学び、実践する。 3 S G H 課題研究テーマに関する異なる観点を得ることにより、課題研究の内容を深化させる。 4 藩校時代より本校との関係の深いオランダ王国で行われる国際青少年会議（主催 ドラードカレッジ校）に出席し、ヨーロッパ各国の高校生との協働を通じ、国際的な視野を広げる。 5 コミュニケーション能力（英語を含む）を育成する。

【イ 日程】（令和元年度例）

月 日	スケジュール等	宿 泊
令和元年 11 月 7 日（木）	・成田発 ・アムステルダム着、ライデンへ移動	ホテル （ライデン）
11 月 8 日（金）	・ライデン現地調査（シーボルト博物館・国立民族博物館にて学芸員による説明・インタビュー） ・ライデン大学訪問（ライデン大学学生とのディスカッション） ・アムステルダムへ移動	ホテル （アムステルダム）
11 月 9 日（土）	・アムステルダム現地調査（アンネフランクの家） ・ウィンシュホーテンへ移動	ホームステイ （ウィンシュホーテン）
11 月 10 日（日） ～ 14 日（木）	・ドラードカレッジにて国際青少年会議参加 議題： <i>What will society look like in the coming decades?</i>	ホームステイ （ウィンシュホーテン）
11 月 15 日（金）	・国際青少年会議終了後アムステルダムへ移動	ホテル （アムステルダム）
11 月 16 日（土）	・アムステルダム発	機内
11 月 17 日（日）	・成田着	

【ウ 事前指導】（令和元年度例）

（ア）日程

回	日 時	内 容
1	7 月 18 日（金）	ドラード：カレッジ、コナイン先生、前年度派遣生徒との会
2	7 月 23 日（水）	リーダー決め・課題確認
3	7 月 30 日（金）	保護者説明会
4	8 月 5 日（火）	ディスカッション、プレゼンテーション準備
5	8 月 6 日（水）	S G H アクティブ国立歴史民俗博物館研修 1 福岡 万里子 准教授 歴博で近世（江戸～幕末）の対外関係を学ぶ
6	8 月 23 日（金）	S G H アクティブ国立歴史民俗博物館研修 2 田中 大喜 准教授 歴博で中世（平安～室町）の生活・文化を学ぶ

7	8月30日(金)	ディスカッション、プレゼンテーション準備
8	9月4日(水)	SGH課題研究・手法について
9	9月6日(金)	特別講義：オランダ地誌 関研一 教諭(地歴公民科)
10	9月11日(木)	ディスカッション、プレゼンテーション準備
11	9月13日(金)	前年度派遣生徒との会
12	9月18日(水)	ディスカッション、プレゼンテーション準備
13	9月20日(金)	ディスカッション、プレゼンテーション準備
14	9月25日(水)	SGH課題研究アンケート作成
15	10月4日(金)	SGH課題研究アンケート作成
16	10月23日(水)	プレゼンテーションリハーサル
17	10月25日(金)	ディスカッション準備
18	10月30日(水)	プレゼンテーションリハーサル
19	11月1日(金)	ディスカッション、プレゼンテーション準備
18	11月6日(水)	旅行会社との最終確認・結団式(教頭挨拶・引率挨拶等)

※この他、英語で様々なことを説明する準備として、昼食時の会話練習(ALTと共に週1回)

※平成28年度には

千葉大学法政経学部 水島治郎教授による特別講義「オランダにおける多文化共生」実施

【エ 現地での活動】

(ア) フィールドワーク(ライデン・アムステルダム)

①ライデン市内

現地ガイドに、歴史と文化の町、ライデンについて、名所を訪ねながら案内してもらう。レンブラントの生家、英国からのピルグリム・ファーザーズが渡米前に滞在していた史跡などを巡り、また、ライデン市民がオランダ独立戦争で果たした役割、報償として減税よりも大学の設立を望んだこと等の説明を受ける。

②シーボルトハウス・国立民族学博物館

シーボルトハウスでは、日蘭関係担当のフォーラー邦子氏の案内で館内を見学する。1823年にオランダ政庁の医官として日本のオランダ商館に派遣されたフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが集めた美術品や日用品、植物学や動物学の資料、地図などを鑑賞した。様々な分野のものについて体系的に網羅して収集している様子がよくわかるものである。世界の様々な民族の過去の暮らしを知ることができる国立民族学博物館では、日本・韓国コレクション学芸員のダン・コック氏の案内で、日本のコレクションを鑑賞する。本校SGHの研究テーマである「日本の歴史・伝統・文化」が海外で紹介されている様子を調査する機会となる。

<生徒感想例>

- ・シーボルトの収集には、完成形のものを集めたものだけでなく、その原料、作るための道具、また作っている人の模型まであった。また素材、産地などによる違いもとても分かりやすくまとめられていた。一目で製造工程が分かったり、違いが分かったりする彼の展示は、SGH研究の発表をはじめ、様々な場面で生かすことができると思う。
- ・展示品には私が習っていた琴も含まれていた。篠笛や茶道なども習っていたことがあり、今回は機会が無いが紹介したい。日本の伝統文化には他にはない魅力があると思うので発信していきたい。

③ライデン大学学生との交流

ライデン大学にて、同大学日本語学科及び韓国語学科学生が参加する学生団体、『狸の会』の方々と交流する。「よさこいサークル」による「よさこい」のパフォーマンスを觀賞したり、シーボルトが持ち帰ったとされる日本の植物も生育する植物園、日本を初めアジア各地の言語の書籍が充実した大学図書館等を案内してもらい、昼食を共にする。

④アンネ・フランクの家

アンネ・フランク一家が1944年にアウシュビッツの強制収容所に送られるまでの2年間を過ごしたと言われている隠れ家を訪れる。一家が住んでいた裏側の建物に通じる回転式本棚や、アンネが日記を書き続けた部屋などが当時のまま保存、展示されている。生徒たちにとって、歴史継承の重要性や、迫害や戦争などのグローバル課題について考える好機となっている。

<生徒感想例>

- ・とても重い空気が滞留していて、生々しいリアルな当時の情景を想像させた。ナチスの脅威に怯えながら、物音ひとつ立てずに生活しないといけない。衛生環境は悪くプライバシーもない。それがどれだけつらいものだったかは実際に経験した人にしかわからないもので、私の想像をきくと、はるかに超えるものだろう。しかし私はあの場所で、彼らの体験をほんの一部共有することができた。心から悲しみ、心から平和を願った。
- ・ガイドの方がユダヤ人迫害を“とても大きないじめ”と表現した。この一言で、私のユダヤ人迫害に対する考え方は大きく変わった。過去の負の遺産であるが、私とはかけ離れた問題だと思っていたが、これは非常に身近な問題であると気が付くことができた。弱者を攻撃することでまともうとしたり、安心しようとしたりする。これが国家単位で行われたために多くの犠牲者がでたが、それと同じことが私たちの身の回りでも起こっている。

(イ) 国際青少年会議（ウィンシュホーテン）

オランダ北東部、ドイツとの国境付近のウィンシュホーテンにあるドラード・カレッジが主催する国際青少年会議に参加する。この研修の中心となる活動であり、1週間にわたり行われる。生徒はドラード・カレッジ生徒宅にホームステイしながら、学校での活動に参加する。参加国は本校以外は全てEU内のドラード・カレッジの交流校である。

参加国（学校名省略）

平成28年～平成30年 イタリア、ドイツ、フィンランド、ポーランド、オランダ、日本
令和元年 スペイン、ドイツ、ポーランド、オランダ、日本

プロジェクト課題

平成28年 Promoting a country wanting to join EU-topia

トルコ、スコットランド、ウクライナ、セルビアのいずれかの国についてEU加盟国としてふさわしいことを発表

平成29年 What will the ideal school of the future look like? 未来の理想の学校とは

平成30年 What will the ideal school of the future look like?

令和元年 What will society look like in the coming decades? 近未来の社会の姿

このプロジェクトでは様々な国からの参加者が6班程度に分けられ、最終日のプレゼンテーションに向けた協働学習を行う。途中には分野別研修（経済、科学、アート・メディア・デザイン、社会科学）が設けられ、各班の分野担当者がそれぞれの研修に参加し、研修での学習成果を持ち帰り班で共有することが求められる。最終日には各ブースでのポスター、パンフレット、模型などの展示を使ったプレゼンテーションと舞台での演劇を用いて全体発表を行う。

その他、各参加校の紹介プレゼンテーション、アムステルダム国立美術館、市立美術館、ゴッホ美術館、現代美術館に分かれての遠足、クリエイティブ・ワークショップ（ズンバ、歌、劇、ジャンベ、書道等の文化体験）、インターナショナル・クッキング・フェスティバル（参加者の国の料理を持ち寄り会食）が行わる。



<生徒感想例>

- ・会議中、私は社会に対する知識の少なさを痛感した。オランダ人のみならず海外の人は社会問題や生活・文化に対する知識が豊富で、様々な観点から物事を考えられる。多くの人は新しいもの、興味を持ったものに対して、「知りたい」という意思が強く感じられた。その好奇心が、豊かな知識、自分以外を受け入れて共に活動していく力に変わっていると感じた。
- ・日本について、自分たちの生活について聞かれて十分に答えられないことが多々あり、自国の文化に対する知識のなさを思い知らされた。
- ・他国の参加者は第2外国語として学んでいる英語を流暢に話していた。私たち日本人が他国に比べ英語力が低い原因は英語に触れる機会が圧倒的に少ないことだと思う。学校の授業以外に英語に触れる機会が無い中で英語力を高めていくには、自分で英語に触れる機会を作るしかない意図考える。
- ・自分に足りないもの、グローバル社会に必要な力について考える良い機会となった。語学力はもちろんだが、わからないことは尋ね、自分の意見をはっきり伝える積極性、違いを面白いと感じ理解しようとする、多角的にもの後を見ること、柔軟な発想が大事である。
- ・Whyと聞かれて窮することが多かった。自分の考えにしっかりとした理由が伴っていないということにこれまで気づいていなかった。大切なことは、結果に至るまでの過程であって、そこを疎かにしては本当の意味での結果にたどり着けないということを肝に銘じた。様々なことに真剣に向き合い、なぜそう思ったのかを聞かれても常に答えられるようにしなくてはと思った。

(ウ) S G H課題研究現地調査

各自が課題研究に関する質問・調査事項を準備し、現地において国際青少年会議参加者やライデン大学学生、ホストファミリーに回答と求めたり、話し合うなどして情報を持ち帰り各自の研究に生かした。

平成28年

①戦争を語り継ぐ ②民話、妖怪 ③英語教育 ④難民の受け入れ ⑤イスラム教

平成29年

①川の水質汚染 ②和菓子 ③千葉県への観光客誘致 ④外来種

平成30年

①食品ロス ②スマートアグリ ③動物の殺処分

令和元年

①プラスチック・ゴミ ②食品ロス ③動物の殺処分 ④ユニバーサルデザイン
⑤伝統工芸の5つである。

<生徒考察例> (令和元年度例)

①プラスチック・ゴミ

「この問題について学んだり話したこと」が無いと答えた欧州高校生はいなかったが、9%の佐倉高校生が無いと答え、意識の差があると感じた。生活の中でも、オランダのスーパーマーケットでは、レジ袋が有料化されており、土産屋でも、必ず「袋をお付けしますか。」

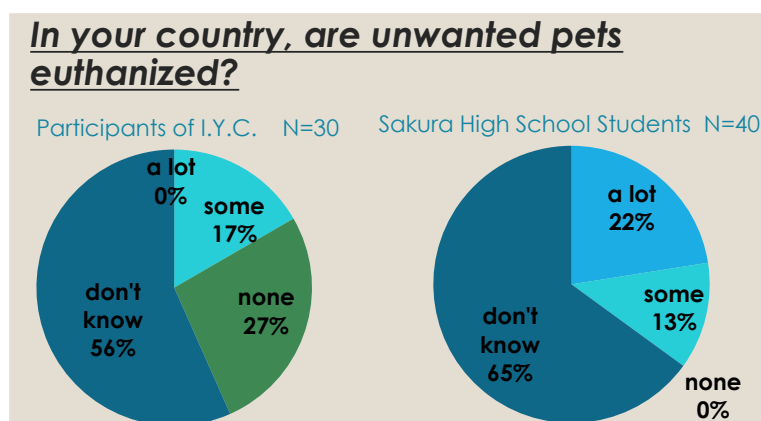
と尋ねられた。日本だったら、小さい袋に入れたうえで、大きな袋にまとめて入れ、さらに土産用に余分に袋を2,3枚くれるだろう。日本のおもてなし文化の一部であると思うが、考えていくべき問題だと思った。また、一人ひとりの意識も日本と比べて高いように感じた。ごみの分別について、ホストファミリーが細かく教えてくれ、守るようにと言われた。オランダでは、ごみは6種類に分別し、多少ややこしいが、みんな守っている。またプラスチック製品の仕様に否定的な意識も感じられた。

②フードロス

「今までに食品ロスについて学ぶ機会があったか。どこで学んだか」という問いに対しての答えは日本人とほぼ変わらず、約80%が学んだことがあり、中学校、高校、メディアが多かった一方で、「食品ロスを減らすために何かやっていることがあるか」という問い「はい」と答えたのは、日本46%、欧州が70%と大きく差が出た。これは意識の差であり、学んだことがあるけれども実行しない日本人は、もっと行動してほしいと思う。

③動物殺処分

「この問題について学んだり、話したりする機会があったか」については、欧州83%、日本60%と大きな差が出た。「自分の国で保護動物の殺処分が行われていると思うか」について、欧州学生は「無い」「ある程度」という答えのみで「多数」の答えは一つも無く欧州と日本の実情を反映していると思うが、一方で欧州、日本共に「わからない」と答えた人が過半数であり、自分の国の実情を知ることの（伝えること）の重要性を感じた。



【オ 事後指導】

(ア) レポート

帰国後、生徒は研修の成果をレポートにまとめて提出した。

(イ) 報告会

毎年12月の下旬に報告会を行い、研修成果を1学年生徒と共有する。

① 日 時 12月下旬

② 対 象 1学年生徒

③ 場 所 体育館

④ 内 容 課題研究に関する現地フィールドワークの成果と課題や、オランダで日本の文化・伝統がどのように紹介されているか、研修を経て国際的な視野・コミュニケーション能力について考えたことについて報告。

(ウ) アンケート

初年度を除く平成29年以降は帰国後、参加生徒に他の海外研修と同じアンケートを実施した。下は実施3年間の参加生徒合計15名の回答である。項目によっては、質問内容が異なる平成29年度の結果を除いてある(合計10名)。

1 この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
86.7% 13/15 人	13.3% 2/15 人	0	0
2 この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
100% 15/15 人	0	0	0
3 日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができる。			
かなりできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできなかった
20.0% 3/15 人	80.0% 12/15 人	0	0
4 課題研究の内容についてオランダの高校生や大学生と英語で話し合うことができた。			
かなりできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできなかった
20.0% 2/10 人	60.0% 6/10 人	20.0% 2/10 人	0
5 今回の海外研修で、課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
53.3% 8/15 人	33.3% 5/15 人	13.3% 2/15 人	0

【カ 成果と課題】

この研修の目的1「本校SGHの研究テーマである『日本の歴史・伝統・文化』が海外でどのように紹介され、現地の人々にどのようにとらえられているか現地調査する」は十分に達成された。シーボルトハウス・国立民族学博物館の収蔵品や展示の方法には、シーボルトの日本滞在時の日本人の暮らしがよくわかる工夫がなされており、日本人にとっても興味深く、学ぶところの多いものであった。また、生徒は、学校生活・文化紹介準備の過程での学びや、現地での発表への反応、ホストファミリーや友人との交流を通して日本の歴史・伝統・文化がどのようにとらえられているかを知ることができた。さらに、全員が、自己の知識不足を実感し、自国の文化・伝統について興味を持って学び、説明できることの必要性を口に出している。

目的2「インタビュー・アンケート等、フィールドワークの手法を学び、実践する」及び、目的3「SGH課題研究テーマに関する異なる観点を得ることにより、課題研究の内容を深化させる」については、事前に質問事項やアンケートを作成し、ドラード・カレッジ学生、ホストファミリー等から貴重なデータ収集をすることができた。帰国後、同じ内容のアンケートを本校生徒にも実施し、日本との比較をした生徒もいた。アンケート作成の過程で、回答しやすい発問の仕方や、各自のトピックについて語る上で必要な語彙表現、収集したデータの比較に適したグラフや提示方法について学ぶ機会にもなり有効であった。1年の現時点では、課題研究も調査の段階であるが、十分に異なる観点を得る機会となったと言えよう。

目的4「藩校時代より本校との関係の深いオランダ王国で行われる国際青少年会議（主催ドラードカレッジ校）に出席し、ヨーロッパ各国の高校生との協働を通じ、国際的な視野を広げる」目的5「コミュニケーション能力（英語を含む）を育成する」についても十分に達成された。全ての生徒が口にしていたのは、「日本人が普段英語を使う機会が圧倒的に少ないこと」であり、自分で意識して学習に取り組む必要性である。また「海外の学生が自分の意見を十分な説明と共に述べることに慣れており、自分の国の歴史、文化や時事問題にも詳しく、人に説明ができる」ということであり、自分たちもそうあらねばと強く意識したようである。また、英語はもちろん、他のヨーロッパ言語及び文化に対する興味・関心も高まった。

課題としては、例年1年生が参加するために、国際青少年会議プロジェクトで扱われる話題に対する知識や、英語の語彙表現力が不足気味になる点である。毎年、事前指導で補うようにしている。EU諸国の学生は英語の表現力だけでなく、常日頃から自分の考えを十分に述べたり説明したりする訓練がなされており、これらのグローバル社会を生きるために必要な力を生徒が実感する良い機会となっている。

(4) ドイツ

【ア 概要】

訪問先	デュッセルドルフ（デュッセルドルフ市役所、デュッセルドルフ大学、デュッセルドルフ日本国総領事館、ツェツィリアン・ギムナジウム）、ボン（歴史博物館）、エッセンツォルフエイン炭鉱、ケルン（大聖堂）等（ドイツ連邦共和国）
日時 及び 参加者	平成30年3月14日（水）～3月20日（火）6泊7日 2学年生徒10名 男子2名 女子8名 引率教員 教諭 戸村玲子（英語科）、鬼崎晴雄（英語科） 平成31年3月13日（水）～3月19日（火）6泊7日 2学年生徒11名 男子6名 女子5名 引率教員 教諭 戸村玲子（英語科）、秋保紗英（国語科）
目 的	1 現地の学生・社会人を対象に課題研究の成果を発表し、フィードバックを受け、ディスカッションを通じて異なる視点を得たりすることにより、課題研究テーマについて考え、まとめる一助とする。 2 課題研究のテーマに関わる調査等を通して、生徒自身の研究に必要な情報を収集し、研究を深化させる。 3 活動全体を通じて教養を高めるとともに、現地の学生との交流を通じて国際的視野を広げ、さらにコミュニケーション能力を高める。

【イ 日程】（令和元年度（派遣中止）例）

月日	スケジュール等	宿泊
令和元年 3月13日（金）	・成田発 ・デュッセルドルフ着	ホテル
3月14日（土）	・現地調査（ケルン大聖堂、ボン歴史博物館等）	ホテル
3月15日（日）	・現地調査（デュッセルドルフ市内、エッセンツォルフエイン炭鉱遺産郡等）	ホテル
3月16日（月）	・デュッセルドルフ日本総領事館、デュッセルドルフ市庁舎訪	ホテル
3月17日（火）	・ツェツィリアンギムナジウム（現地高校）訪問	ホテル
3月18日（水）	・デュッセルドルフ大学訪問 ・デュッセルドルフ発	機内
3月19日（木）	・成田着	

【ウ 事前指導】（令和元年度（派遣中止）例）

（ア）日程

回	日時	学習内容
1	11月 5日（火）	リーダー決め、パスポート申請書配布、予定確認
2	11月21日（木）	SGH課題研究確認
3	12月 6日（金）	保護者説明会
4	12月12日（木）	プレゼン準備、書類提出
5	12月13日（金）	特別講義：ドイツ地誌 関研一 教諭（地歴公民科）
6	12月23日（月）	SGH発表準備、冬休み前の確認
7	1月 9日（木）	特別講義（GLアクティブ） 本校同窓生 寒郡茂樹氏 「世界の市場を視野に入れたビジネスモデルについて学ぼう」
8	1月16日（木）	プレゼン準備

9	1月17日(金)	プレゼンスライド+原稿提出
10	1月23日(木)	プレゼン+Q&A
11	1月24日(金)	プレゼン準備
12	1月30日(木)	プレゼン+Q&A
13	1月31日(金)	プレゼン準備
14	2月7日(金)	プレゼン+Q&A
15	2月20日(木)	デュッセルドルフ大学生来校。プレゼン+Q&A プレゼン準備
16	2月21日(金)	プレゼン+Q&A
17	2月27日(木)	プレゼン準備(最終)
18	3月12日(木)	結団式 校長挨拶、引率挨拶、最終確認(予定)

*この他、英語で様々なことを説明する準備として、昼食時の会話練習(ALTと共に週1回)

*平成29年度には

千葉大学国際教養学部 清野智昭准教授による特別講義「ドイツ初級とドイツ事情」実施

【エ】現地での活動

(ア) JETRO 訪問(平成29年度)

デュッセルドルフ日本総領事館訪問(平成30年度、令和元年度(派遣中止))

JETROの役割りやドイツでの労働慣習、日系企業について、総領事館の役割などについてブリーフィングの後、研修参加生徒のうち代表者が課題研究発表を行い、質疑応答、助言をいただく。中止となった令和元年度については日本総領事館の文化振興部現地職員の人数を増やして指導助言を頂ける予定であった。

発表テーマ

平成29年度 ①難民問題 ②佐原の大祭と海外観光客誘致

③伝統工芸品を広める試み ④訪日客を助ける手ぬぐい

平成30年度 ①平和教育(戦争を語り継ぐ) ②伝統工芸品を広めるための試み(組紐)

③動物保護(殺処分される動物を減らすための保護施設支援)

令和元年度予定 ①プラスチック海洋汚染 ②農泊 ③ジェンダー

(イ) デュッセルドルフ市庁舎訪問

①市手配のガイドによる90分の旧市街ツアー

②ブリーフィング

市の担当者より、デュッセルドルフ市と日本、日本企業とのつながり、文化交流や行事などについて説明を受ける。また、参加生徒の研究課題である、難民問題、平和教育、動物保護、環境への取り組み(外来種生物、食用油の処理、リサイクル)などについて、デュッセルドルフ市やドイツでの取り組みについての説明していただく。

③市長による歓迎式

(ウ) デュッセルドルフ大学訪問

①SGH課題研究発表

2~3名×5グループの本校生に対し日本語専攻の大学生1名がついて、10分ずつの英語による発表と質疑応答を数回ローテーションする。大学生から各発表に対して、質問、改善のための提案や、発表の仕方や発表資料の作り方への助言をもらう。

②交流

2グループに分かれて日本語・英語で会話する。日本の大学への留学を終えて帰国した大学生、秋に留学する大学生など日本語が流ちょうで日本の文化にも興味のある学生が多く、日独の文化の違いなど様々なことについて話をする事ができる。



(エ) ツェツィリアン・ギムナジウム訪問

① S G H課題研究発表

平成29年度は、大ホールで全体に向けて、平成30年度は2グループに分かれ、歴史、地理、生物、日本語などの授業の中で、課題研究発表を行ない、現地生徒による質疑応答を行った。日本語授業のクラスでは日本語も使いながら交流した。

② 昼食交流会

現地校の生徒が持ち寄った様々な料理を食べながら自由に話すスタイルで交流する。



発表テーマ

平成29年度

- ①難民問題 ②佐原の大祭と海外観光客誘致 ③伝統工芸品を広める試み
④共働き家庭のためのキッズキャンパス ⑤海外読者向け漫画ペディア
⑥訪日客を助ける手ぬぐい ⑦日本文化の中の水 ⑧日本のマナー

平成30年度

- ①平和教育（戦争を語り継ぐ） ②伝統工芸品を広める（組紐）
③動物保護（殺処分される動物を減らすための保護施設支援） ④印旛沼の外来種草
⑤統一ピクトグラムによるゴミ分別 ⑥あんこを広める ⑦佐倉への観光客誘致
⑦佐原の大祭と海外観光客誘致 ⑧佐倉茶を広めるお菓子 ⑨成田市場活性化

令和元年度（派遣中止）

- ①プラスチック海洋汚染 ②農泊 ③ジェンダー ④急須で入れるお茶
⑤放課後子供保育

(オ) 現地調査

ツォルフェアイン炭鉱世界遺産（ルール工業地帯）、ボン現代歴史博物館、ボン大学周辺、ベンラート城、アウグストゥスブルク城、ケルン大聖堂などを見学する。ドイツの歴史の様々な時代の生活の様子や政治情勢、産業、宗教、建造物、及び地域の特徴などについて学ぶことができ大変有意義である。

【オ 事後指導】

(ア) レポート

帰国後生徒は研修の成果をレポートにまとめて提出した。

テーマ：戦争を語り継ぐ（平成30年度例）

- ・ドイツには、戦争やホロコーストに関する博物館など、過去の歴史を学ぶことができる場所がたくさんあり、生徒たちが学校の授業の一環として、それらの場所に行き学ぶこともある。また、ドイツでは、歴史や文学など、様々な授業で戦争について学ぶ。
- ・大学でも、授業の一つとして戦争の歴史について学ぶが、教授が一方的に語る事も多い。私たちのように、高校生が他の生徒や小学生に向けて授業をするというスタイルは年齢も近い同士で積極的に取り組むことができ、よい試みであるという感想もいただいた。
- ・ドイツは、大量虐殺という負の歴史も抱えており、この研究に対し否定的な意見も寄せられるのではないかと予想していた。しかし、実際に得られた意見は「歴史に向き合い、将来に何をすべきか考えていく」という、とても前向きなものであり、若者がそのように考えることは平和を築く上でとても重要であると思った。ただし、ドイツの平和教育について日本と同様、情報は与えられるが、そこで終わってしまうことも多いのではと感じた。日本でもドイツでも、与えられたものから、自分が将来すべき事を考え行動していくことが重要であると思う。
- ・日本でもやがて戦争体験者がいなくなる時代が来るが、その時代が来た時に、過去の歴史を正しく伝え、率先して平和を保とうと努力する必要がある。

テーマ：働く女性のための子育て支援 Childcare for Working Women（平成29年度例）

私は働く女性の子育て支援として、小学校高学年の児童の学童保育に焦点を当て、国の「放課後子供事業」を参考にした放課後教室“Kids Campus”を提案した。

これは、学童保育の対象が低学年児童優先であるために学童保育をやめることを余儀なくされた高学年児童の居場所作りを目的としたもの。小学校の空き教室を活用し、スタッフ・地域住民・学生の三者が連携して基本的に無料でさまざまな体験活動を行えるような施設とした。

ドイツ研修では高校と大学で研究発表を行った。発表の後、いくつかの質問をいただいたが、その中にあらかじめ想定していた日本の子育て制度（学童保育や保育所など）だけでなく、「日本では女性が働いて男性が家事をすることについてどう考えられているのか。」、というような質問もあった。

また、大学では、ドイツの子育て支援制度についても詳しく教えていただくことができ、自分の研究において新たな視点を得ることができた。

<ツェツィリアンギムナジウムでの質疑応答>

現地校Q：日本では父親が“主夫”をして母親が働くことはあるのか、またそれに関して周囲はどのように捉えることが多いのか。

生徒A：以前よりは増えていると思うが、まだ少なく理解も進んでいないと思う。

Q：女性が占める管理職の割合を定めた法律はあるのか。

A：主に大企業に目標があったりはするが、未だ十分ではないし、中小企業では更に厳しい。

上記の質問に対して、自分は意識せず「働く女性のための子育て支援」としてテーマを設定していたが、高校生からの上記の質問を受けて、その視点も必要だと思った。また、高校生・大学生の両方から日本とドイツの子育て制度や現状は大きく違うという意見をいただいたが、その違いがどのように、またなぜその様な違いがあるのかをもう少し深く掘り下げてみたい。

(イ) 報告会

翌年度5月の月上旬に報告会を行い、研修成果を1・2学年生徒と共有する。

① 日時 5月上旬 GL 総合的な学習（探究）の時間

② 対象 1・2学年生徒

③ 場所 体育館

④ 内容 イギリス研修派遣生徒と共に SGH 課題研究の発表や訪問先での活動報告。

(ウ) アンケート

帰国後、参加生徒に他の海外研修と同じアンケートを実施した。2年分21人の結果である。項目により1年分（11人）のものもある。

1 この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
81.0% 17/21 人	19.0% 4/21 人	0	0
2 この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
85.7% 18/21 人	14.3% 3/21 人	0	0
3 日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができた。			
かなりできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできなかった
9.5% 2/21 人	76.2% 16/21 人	4.3% 3/21 人	0
4 自分の課題研究をドイツの高校生や大学生を対象に英語でプレゼンテーションすることができた。			
かなりできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできなかった
63.6% 7/11 人	27.3% 3/11 人	9.1% 1/11 人	0

5 課題研究の内容についてドイツの高校生や大学生と英語で話し合うことができた。			
かなりできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできなかった
18.2% 2/11 人	63.6% 7/11 人	18.2% 2/11 人	0
6 今回の海外研修で、課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。			
おおいに当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
33.3% 7/21 人	38.1% 8/21 人	28.6% 6/21 人	0

【カ 成果と課題】

本研修の目的である1、2課題研究の深化、3教養、国際的視野、コミュニケーション能力を高めるについて、いずれも十分な効果があったと、生徒の事前準備や現地での活動の様子、事後報告やアンケートの内容、課題研究のまとめから総合的に判断できる。

目的1、2の課題研究発表のフィードバックを受けたりディスカッションすることや各自の課題研究の深化については、訪問先での協力を得て、生徒が何度も発表を経験する機会を得た。具体的には、(1)平成29年度のJETRO訪問、平成30年度の日本総領事館訪問での代表者の発表により、在デュッセルドルフの日本人や現地ドイツ人スタッフの助言を受ける機会、(2)デュッセルドルフ市の担当者より、生徒の研究トピックについて、市やドイツ全体での取り組みの説明および質疑応答、(3)デュッセルドルフ大学生との少人数グループ、ローテーションによる複数回の発表と質疑応答、助言を受ける機会、(4)交流校ツェツィリアン・ギムナジウムでの高校生に対する発表とディスカッションの機会を持つことができた。高校生はもちろんであるが、様々な年齢層、専門分野の方の助言を得る機会があり、様々な視点からの意見や情報を得たり、発表の仕方やスライドの作り方などにも助言得ることができた。上記アンケート結果のうち、6の項目については「あまり当てはまらない」の回答が3割近いが、これは派遣時期が3月であり、自分たちの課題研究をまとめる時期に入っていることも影響している。

さらに、現地でのこのような研修機会に加え、事前研修でのプレゼンテーション準備の段階で、様々な教員の助言を受けたことによる研究深化への効果も大きかった。

3の国際的視野やコミュニケーション能力の育成についても上記のような、様々な機会を経た。現地での活動での質疑応答を通して、英語での即興的な受け答え、複雑な内容を伝える力、自国の文化、歴史を説明するための知識や表現力が不足していることを実感する機会となっている。また、日本社会や日本の学生に足りない部分についての気づきも多く、この点も有意義であった。また、デュッセルドルフを始めケルン、ボン、エッセンなどへの現地調査ではドイツの様々な年代の歴史、文化を学ぶことができ、学校での座学の知識では得られない体験を通して教養を深める機会となっている。

(5) イギリス

【ア 概要】

訪問先	ロンドン近郊（オックスフォード大学、ホリポート・カレッジ、大英博物館など）（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）
日時及び参加者	<p>平成29年3月23日（木）～3月30日（木）7泊8日間 2学年生徒6名（男子2名、女子4名）、1学年生徒5名（男子2名、女子3名） 引率者 教諭 坂本光雄（英語科）、尾竹陽子（英語科）</p> <p>平成30年3月22日（木）～3月29日（木）7泊8日間 2学年生徒4名（男子1名、女子3名）、1学年生徒11名（男子8名、女子3名） 引率者 教諭 坂本光雄（英語科）</p> <p>平成31年3月22日（金）～3月29日（金）7泊8日間 2学年生徒12名（男子1名、女子11名）</p>

	引率者 教諭 尾竹陽子（英語科）、久貝啓介（英語科）
目 的	1 現地の学生との交流を通じて国際的視野を広げるとともに、英語によるコミュニケーション能力を高める。 2 異文化への理解を深めるとともに、自国の文化を再認識する。 3 現地の高校生を対象に課題研究の成果を発表するとともに、ディスカッションを行い、考えを深め、異なる視点を得たりすることにより、課題研究を深化させる。

【イ 日程】 （令和元年度（派遣中止）例）

月日	スケジュール等	宿泊
令和2年 3月21日（土）	・ 成田発 ・ ロンドン着	ホームステイ
3月22日（日）	・ ホストファミリーとの交流（コッツウォルズ）	ホームステイ
3月23日（月）	・ オックスフォード大学でのプレゼンテーション・ディスカッション	ホームステイ
3月24日（火）	・ ジャパンハウス訪問プレゼンテーション、Ecotocity 社訪問	ホームステイ
3月25日（水）	・ ホリポートカレッジ（バークシャー）でのプレゼンテーション・ディスカッション等	ホームステイ
3月26日（木）	・ ロンドン現地調査	ホームステイ
3月27日（金）	・ ロンドン発	機内
3月28日（土）	・ 羽田着	

【ウ 事前指導】 （令和元年度（派遣中止）例）

（ア）日程

回	日 時	学習内容
1	11月21日（木）	グループ、リーダー決め・課題研究確認
2	11月22日（金）	各グループ、プレゼン内容と準備計画書を提出
3	12月 6日（金）	保護者説明会
4	12月12日（木）	課題研究プレゼン準備
5	12月19日（木）	課題研究プレゼン準備
6	12月23日（月）	課題研究プレゼン準備
7	1月 9日（木）	特別講義：イギリス地誌 関研一 教諭（地歴公民科）
8	1月16日（木）	プレゼンスライド+原稿 提出
9	1月23日（木）	プレゼン準備（原稿修正）
10	1月30日（木）	プレゼン+Q&A
11	1月31日（金）	プレゼン準備
12	2月 7日（金）	プレゼン+Q&A
13	2月20日（木）	プレゼン準備
14	2月21日（金）	プレゼン+Q&A
15	2月27日（木）	プレゼン準備（最終調整）
16	3月12日（木）	プレゼン+Q&A（予定）
17	3月18日（水）	結団式・最終確認（予定）

*この他、英語で様々なことを説明する準備として、昼食時の会話練習（ALT と共に週1回）

【エ 現地での活動】

（ア）課題研究テーマ

平成28年度

平成29年度

- ①日本語教育 ②難民受け入れ ③「見た目」問題 ④バリアフリー社会
⑤食品ロスを減らすために ⑥平和の「語り部」運動 ⑦障害者に公平な世界

平成30年度

- ①動物殺処分問題 ②空き家を使った宿泊施設 ③政治への関心を高める
④農泊 ⑤食品ロス ⑥平和の「語り部」運動 ⑦伝統工芸の知名度を上げる
⑧地名の由来 ⑨ピーナッツレボリューション

令和元年度（派遣中止）

- ①新しい農業 ②ベジタリアンフード ③日本茶紹介
③災害時のペットとの避難マップ ④生ゴミの水分を減らす

（イ）オックスフォード大学訪問（平成29年度～）

ケンブリッジ大学訪問（平成29年度、平成30年度）

1時間ほどのキャンパス案内の後、課題研究プレゼンテーションの指導助言を受ける。小グループに分かれ、担当の大学生よりプレゼンテーションの内容、仕方についての確且つわかりやすい助言を受けることができる。また生徒が学生とのコミュニケーションを積極的にし、現地の情報を得る機会となっている。

（ウ）アドモア大学寮滞在（平成29年度、平成30年度）

研修当初は大学寮に滞在しており、帰宅後に現地大学生スタッフとコミュニケーションをとりながら、その日の研修を振り返る活動を行った。

（エ）ジャパンハウス訪問（平成30年度～）

ロンドンから日本文化を発信している「ジャパンハウス」への訪問は、平成30年度に始まった。職員からジャパンハウスの活動について説明を受けたが、日本の伝統工芸の紹介や、日本文化に関する講演会など、日本について発信する様々なイベントがロンドンで行われていること、日本人でない8割の現地スタッフの日本文化に対する知識の豊富さに生徒が驚き、また、自分たちは、日本文化に関して質問されても答えられないなど日本文化に対する知識が無いことを実感する機会となった。派遣中止となった平成元年度には、生徒の課題研究発表への指導助言を受ける予定であった。

（オ）クレアロンドン事務所訪問（平成29年度、平成30年度）

日本の地方自治体と欧州9カ国の友好協力や経済協力の発展のためのサポートを行っているクレアロンドン事務所を訪れる。最初に映像によるイギリスの文化に関する説明があり、その後、現地職員に対して代表生徒がプレゼンを行い、質疑応答の後助言を受ける。

発表テーマ

- 平成30年度 ①伝統工芸の知名度を上げる ②食品ロス問題
③空き家を使った宿泊施設 ④動物殺処分問題

（カ）エコトリシティ社訪問（令和元年度予定、派遣中止）

新たな研修地として企業訪問を企画していた。環境に優しい発電、特に風力発電を行っている会社を訪問すると同時に、ビーガン料理についても研修する予定であった。

（キ）ホリポートカレッジ訪問（平成30年度～）

ホリポート高校は、ヨーロッパや香港などからも多くの留学生が在籍している国際色豊かな高校である。オリエンテーション、交流、校舎案内、ランチの後、2部屋に分かれて課題研究プレゼンテーションを行った。この日までに訪問した各機関での発表で練習を重ね、質疑応答

にもより落ち着いて臨むことができるようになっている。また、同じ高校生同士の質疑応答ということもあり、リラックスした様子でコミュニケーションをとることができる。



(カ) 現地調査

大英博物館を始めとしたロンドン市内見学、ホームステイ先であるコッツウォルズ見学など。

【オ 事後指導】

(ア) レポート

帰国後、生徒は研修の成果をレポートにまとめた。

(イ) 報告会

翌年度5月の上旬に報告会を行い、研修成果を1・2学年生徒と共有する。

- ① 日 時 5月上旬 GL 総合的な学習（探究）の時間
- ② 対 象 1・2学年生徒
- ③ 場 所 体育館
- ④ 内 容 ドイツ研修派遣生徒と共に SGH 課題研究の発表や訪問先での活動報告。

(ウ) アンケート

帰国後、参加生徒に他の海外研修と同じアンケートを実施した。平成29年度、30年度2年分27人の結果である。

1 この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。			
おおいに当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
74.1% 20/27 人	18.5% 5/27	7.4% 2/27	0
2 この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に対する興味・関心が高まった。			
おおいに当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
70.4% 19/27 人	29.6% 8/27 人	0	0
3 日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができる。			
おおいに当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
14.8% 4/27 人	59.3% 16/27 人	25.9% 7/27 人	0
4 課題研究の内容についてイギリスの高校生や大学生と英語で話し合うことができた。			
おおいに当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
44.4% 12/27 人	44.4% 12/27 人	11.1% 3/27 人	0
5 今回の海外研修で、課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。			
おおいに当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
70.3% 19/27 人	25.9% 7/27 人	3.7% 1/27 人	0

【オ 成果と課題】

研修の目的1「現地大学生との交流を通じて国際的視野を広げるとともに、英語によるコミュニケーション能力・プレゼンテーション能力の伸長を図る。」オックスフォード大学の学生との交流において、1人の大学生に佐高生2～3名という小グループでプレゼンテーションを行えたことは大変有意義であった。大学生たちは課題研究の内容だけでなく、プレゼンテーションの効果的な方法や、インパクトのあるスライドの作り方、そしてスピーチの方法など、多義にわたって熱心なアドバイスを与えてくれた。また、クレアロンドン事務所では大人の視点からのアドバイスをもらうことができた。どちらの場面でも生徒全員が積極的に質問や自分の意見を述べていたのがとても印象的であった。この2つのプレゼンテーションの経験は、生徒たちの国際的視野を広げ、英語でのコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の伸長に役だったことは言うまでもない。

目的2「英国の文化・伝統に触れ、異文化への理解を深めるとともに、自国の文化を再認識する。」については、まず、ロンドン研修で訪れた大英博物館をはじめとして、ウエストミンスター寺院、バッキンガム宮殿においては近衛兵の交代の儀式などを間近に見ることができ、ロンドンの通りを歩きながら英国という歴史と伝統を肌で感じることもできた。さらに、今回の研修では昨年までとは違い、生徒は1週間ホームステイをした。これは最も効果的な異文化理解だったのではないだろうか。日々の生活の中で、身近な生活習慣の違いを理解し、ホストファミリーとの会話の中に考え方の相違を見いだし、自国の文化を再認識し、かつ自分を見つめ直す大変良い経験になったと思う。

目的3「現地高校生を対象に課題研究の成果を発表するとともに、質疑応答やディスカッションなどを通じて異なる視点からの考えを知り、研究を深化させる。」については、オックスフォード大学生たちによる指導やクレアロンドン事務所で様々な助言を経て、ホリポートカレッジでは生徒たちは全員自信を持って堂々と最終プレゼンテーションを行うことができた。3カ所でのプレゼンテーションによって、日本では考えも及ばなかった様々な質問を受け、それを日本に持ちかえり、さらに研究を深めることができ、日本の課題研究グループメンバーにとっても大きなフィードバックになった。

6 実施内容 <その2> 令和2年度 海外派遣研修に代わる取組

コロナ禍における、海外研修中止に伴い、主にオンラインの活用により、海外及び国内の大学生、高校生に向けて課題研究成果を発表しフィードバックを受ける機会、及び希望者を募ってメールやビデオの交換などにより交流する機会を設けた。

(1) 国内の大学との連携による、留学生に向けた課題研究発表

ア 日時 令和2年8月24日(月) 6・7限

イ 参加者 2年F組、2年G組生徒

ウ 助言者 東京大学留学生3名(カナダ、マレーシア、中国) 県内ALT1名(フランス)

エ 内容 8班が発表し、オンライン参加の留学生と来校によるALTによる質疑応答を行い、助言を受けた。

オ 実施方法

- ① 8グループが発表(質疑応答を含め7分以内)を行い、他の生徒はコメント等を記入する。
- ② 留学生とはGoogle Meetを用いて、オンラインによるセッションを行った。ALTは来校していただき、直接指導・助言をいただいた。オンラインによる指導助言については、あらかじめ発表用スライドを送り、コメントや生徒からの質問に対する回答を後で送ってもらう等により、オンラインでのコミュニケーションを補完した。

カ 発表テーマ

	Topic
Group 1	Welcome to Sakura
Group 2	Revival of the Shopping Street
Group 3	Increase the Voting Rate among the Young
Group 4	Salt & Vinegar

Group 5	Help Mark
Group 6	Emerging Infectious Diseases and Climate Change
Group 7	Promoting Tourism in Sakura
Group 8	No More Bullying on the Internet

キ 指導助言者からのコメント例

① **Content of the research**

The content of the presentation showed good background research and helped to explain the theme of political interest among the youth of Japan. The different points were also well organized giving the presentation a natural flow.

② **English / Delivery**

I admire the presenter's bravery to deliver such a controversial topic (without scripts). The timing is a little too long I supposed. It was interesting that the presenter started off with a story to capture the audiences' imagination and related to their daily lives.

③ **Slides**

The slides used a large amount of text, which was confusing for the listener at times. It would be helpful to have more visuals on the slides to improve clarity.

The slides emphasized the key works and divided slides in a logical flow. This made the slides easily viewable and the audience could pick up the main ideas well.

ク 生徒からの質問に対する答えの例

① We noticed capitalism tend to put profit over safety or concern. Do you think capitalism can contribute this problem?

⇒ I agree that capitalism has allowed a very unsustainable way of consumption and use of natural resources. As we learn about how current lifestyles damage the earth we can also discover alternative ways to reduce our carbon footprint. This involves support projects that fight climate change, as well as supporting companies and politicians that will not just follow the existing system of unsustainable behavior.

② Please tell us about the situation of social media and the internet in your country. Are there any problems?

⇒ Canada also faces the challenge of internet bullying, and this has become a bigger issue in recent years because children start to use the internet at an earlier age. Parents are encouraged to teach their children about internet safety, while schools must discuss types of bullying and include internet bullying in this talk.

③ Why do you think internet bullying happens? How can we stop internet bullying?

⇒ I think it's deeply cultural. There is a link between the meritocracy and internet bullying. For example, if A-san scores well in the exam, he or she may be targeted for bullying due to jealousy. The compatibility of values is also important. For example, a country which focuses on spiritual qualities may ostracize someone for hoarding too much material wealth (and vice versa). In my opinion, a more forgiving society is the key to mitigating internet bullying by accepting diversity and not imposing a particular standard on people.

ケ 生徒アンケートの結果 (19名)

1 課題研究について英語で発表することができる			
かなりできる	まあまあできる	少しできる	できない
10.5%	47.4%	42.1%	0
2 今回の発表会で、課題研究に対する新たな視点、情報を得ることができた。			
おおいに当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
52.6%	47.4%	0	0

3 今回の発表会は、課題研究の内容を深めるのに役立った。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
57.9%	42.1%	0	0

コ オンライン発表会についての生徒感想抜粋

- ・留学生の方の国によって、言葉の聞き取りやすさが異なり、英語と一口で言っても、いろいろな国の人と交流する大切さを感じた。部屋が明るかったため、白文字のスライドの班は少し見にくかったため、部屋なども考えてスライドを作ることを学んだ。
- ・オンラインで他国の意見などを聞くことができてよかった。発表会という人の前でやる練習ができたのでよかった。
- ・英語で話されているスピードに追い付けず、なかなか質問にその場で答えるのがとても難しかった。オンライン交流であったため、向こう側の反応が発表しているときに見えなかったが、できるだけ伝わりやすいように声をはって話した。遠くにいる人でもこんなに簡単に繋がることができるんだと思うと、技術は進歩しているんだと改めて感じた。
- ・オンラインでも、自分の英語を聞いてもらえて、感想をいただけて、とても有意義な時間だったと思う。
- ・オンラインだと、直接来ていただかなくても実施できる為、これからもっと色々な発表等を簡単に出来る様になれば良いと思った。しかし、おそらくオンラインで繋がって頂いた留学生の方達は、スクリーンが見づらかったり、聞こえにくい部分もあったと思うから、そこはオンラインのデメリットだったかも知れない。



(2) 他機関との連携による取り組み

① 1学年英語発表班練習会

ア 日 時 令和3年1月19日(火) 6・7限

イ 参加者 1学年17班

ウ 助言者 コッツウォルズアカデミーのコーディネーター1名(イギリス)
県内ALT3名(アメリカ)

エ 内 容 3会場に分け、各5～6班が英語で発表、質疑応答を行い、助言を受けた。
イギリス人助言者はオンラインにより参加した。オンラインによる助言者には
予め発表スライドを送った。

② 2学年「学びの発表会」における英語発表班への指導助言

ア 日 時 令和3年1月26日(火) 5～7限

イ 参加者 2学年

ウ 助言者 県内ALT3名(アメリカ、イギリス、フランス)

エ 内 容 2学年「学びの発表会」(全10会場)において、英語発表20班に対して質疑
応答、指導助言を行ってもらった。

(3) 海外研修訪問先との連携による取組

ア 日 時 2月～3月

イ 参加者 1学年4班 2学年5班

ウ 助言者 デュッセルドルフ市役所担当者、デュッセルドルフ大学生、
ツェツィリアン・ギムナジウム (以上ドイツ)
ポリポートカレッジ (イギリス)
ドラードカレッジ (オランダ)

エ 内 容 1、2学年の英語発表班のうち、希望する班が、ビデオ録画した発表や音声付きスライドの形で発表を、海外の連携先に送りフィードバックを受ける。

(4) 海外の高校生との交流

希望者を募り、個人、又は小グループによる交流の機会を設けている。

4月～5月 香港の高校生とのスカイプ交流 2学年6名、3学年5名参加
お互いの休校中、NPOを介して1対1のペアリングにより英語でお互いの興味関心に基づいて交流を行った。

9月～ ドイツ交流高校生とのメール交流 1学年23名、2学年22名参加
ドイツ・ツェツィリアン・ギムナジウムの日本語クラスの学生と本校の希望者が、1対1もしくは1対2のペアリングによりメールなどの交換により交流中。

1月～ イギリス交流校高校生とのビデオ交流 1学年10名
イギリス・ポリポートカレッジで日本語クラブの学生と本校の希望者が、小グループで自己紹介や文化紹介、お互いに対する質問などのショートビデオを作成し交換する活動を継続中。

2月末～ イギリス交流高校生とのオンライン対面交流実施の予定
1学年ビデオ交流、研究発表参加者21名、国際交流委員等

(5) 成果と課題

例年、海外研修への参加は、生徒が課題研究を進める大きな原動力であり、また成果発表の場、学びの場であると同時に充実感や達成感を味わう絶好の機会であった。コロナ禍で海外研修が中止になる中、様々な連携先や海外の交流校、機関との代替の活動を模索した。8月に実施した大学留学生に向けての発表会は、参加生徒にとって、課題研究の新たな視点を得たり、内容を深めるために、またその後の研究の動機付けのために大きな効果があったりしたことが、生徒へのアンケート結果や感想から伺える。海外交流校や連携先など、より多くの人たちに成果を発表し、フィードバックを受ける機会が重要と考えている。相手側にあまり負担をかけず、なるべく多くの研究にフィードバックをもらえる環境を今後も整えていく必要がある。また、今年度は、その時点までの研究成果を発表することが中心であったが、年度の半ばなどにも、調査のためのアンケートに協力してもらう機会などが作れると良い。

オンラインによる指導助言については、あらかじめ発表用スライドを送り、コメントや生徒からの質問に対する回答を後で送ってもらう等により、オンラインでのコミュニケーションを補完した。また、当日のやり取りや、ビデオを録音の際には、音声は明確に聞き取れる工夫をしている。オンラインによる交流の場合、音声画像・通信手段により、参加人数やコミュニケーションの仕方への制約、時差などによる交流時間の制約など様々な問題があるが、最善の方法を探りつつ、発表・交流の機会を担保して行きたい。